

書評

石原美奈子編著『現代エチオピアの女たち——社会変化とジェンダーをめぐる民族誌』、東京、明石書店、2017年、302頁、5,400円＋税

富永 智津子

本書は、キリスト教（正教）を支配の柱とする北部の「アビシニア王国」が南部のイスラム地域を制圧し、「エチオピア帝国」へと展開をとげる19世紀末から、その最後の皇帝ハイレセラシエ1世帝政期（1930～1974）を経てデルグ政権期（1974～1991）、そしてエチオピア人民革命民主戦線＝EPRDF 政権期（1991～現在）へとという政治権力の変遷にともなう社会変化とジェンダーをめぐる女性の民族誌である。4部8章から構成されている。

1. 第1部「変貌する家族」

第1章 児玉由佳「土地を獲得する女性たち」は、1991年にEPRDF政権によってアムハラ州の調査村で施行された土地再配分の検証報告である。画期的だったのは、初めて成人女性にも男性と同等の土地が割り当てられたことである。この権利はたとえ離婚してもはく奪されない。したがって、前夫や他の男性に土地を貸して地代を手にすることができる。その結果、土地権の獲得は、世帯における女性の地位を大きく変えた。ただし、土地不足により、再配分が行われたのは1回だけで2回目はないという。ということは、この再配分に伴うジェンダー関係の変化に未来はないことを意味する。その一方で、再配分できない分の埋め合わせをするかのように、結婚時に女性も男性も、家畜だけでなく土地も親から分轄してもらうという慣習がこの10年の間に急速に普及しているという。結婚する男女が土地を持ち寄ることによってようやく生存維持できる状況から編み出された新たな慣習だという。共稼ぎによって、ようやく生活を維持している世帯が増加している日本の状況とも重なる風景である。

第2章 松村圭一郎「越境する女性たち——海外出稼ぎが変える家族のかたち」によると、2012年の1年間で20万人のエチオピア人女性が家政婦やメイドとして中東諸国に出稼ぎに出たという。調査対象の6集落173世帯からも76人の出稼ぎ者がでた。そのうち男性はひとり。集落には彼女たちの送金によって、都会的な豪華な家が次々と建てられている。それだけでも世帯内での彼女たちの地位は大きく変化しただろう。だが、事はそれだけで終わらなかった。彼女たちは、海外で働くこと、それ自体に生きがいを見出してし



まった。いかに過酷な経験をしようとして、また出稼ぎに行きたいと望む女性たち。その一方で、出稼ぎに不安を募らせる夫や家族——この板挟み状況の中で、女性たちは、どのような家族のかたちを選択していくことになるのか。その答えはまだ出ない、と松村はいう。

土地権と海外出稼ぎ……どちらも女性の意識を変え、地位を高め、それによって家族のかたちを変えつつある。しかし、土地権は獲得しても「農耕～牛耕は男性の労働」という性別分業が続く限り、女性の男性依存は解消しない。一方、買い手市場かつ国の政策に左右される不安定な海外出稼ぎが変えた女性の地位と家族のかたちは、いずれも故郷に女性の自立のチャンスがない限り、持続性は期待できない。評者には、むしろ、この2論文を通して、女性の自立を阻んでいるさまざまな障壁が透けて見えてきたような気がする。

2. 第2部「グローバル言説と向き合う」

第3章 家田愛子「家族計画をめぐるジレンマ」は、世界人口増加の責任の一端を担っていると名指しされたアフリカ諸国に導入されている「家族計画」の調査報告エチオピア版である。見えてきたのは、「短い出産間隔や多産による母体保護」という名のもとに国際機関や国家や NGO によって女性たちに押し付けられている驚くべき避妊の実態である。ピルはともかく、日本では解禁されていないデポプロベラやインプラノンが推奨され、その副作用に苦しむ女性たち。コンドームはほとんど使用されず、避妊はもっぱら女性の責任にされている。評者に見えてきたのは、基本的なセクシュアル／リプロダクティブ・ライツを行使できず、自分のからだを自分自身でコントロールできないエチオピア人女性たちの現状である。その背景には、家田の指摘する結婚や相続に見られるジェンダー格差、あるいは性別分業ゆえに男女両方の子供を産むことを至上命令とする社会規範、そして宗教上の避妊の禁忌がある。家田は、それを、子供の数を減らしたいと望む女性たちが抱える「ジレンマ」と表現した。しかし、評者はそれを、「文化」を無視し、女性だけに「犠牲」を強いるグローバル言説の暴力的介入と表現したい。同じくグローバル言説の介入をストレートに受けている「女性性器切除」(FGC)については、宮脇論文がその現状を丁寧に紹介している。

第4章 宮脇幸生「女性性器切除 (FGC) と廃絶運動」によると、エチオピアはエジプトに次いで FGC を受けた女性の数が多く、施行率は 74%にのぼる。それでも 1980 年代以降のさまざまな廃絶運動の展開により、国全体としては施行率が低下しているという。紹介されている廃絶運動の中で評者が関心を持ったのは、ホールと呼ばれる少数民族の事例である。宮脇の分析から見えてくるのは、「FGC は女性の健康を害し、家父長制の中で女性の人権を侵害し、開発の妨げとなる前近代的な悪習である」として廃絶の対象としたのが国際社会のグローバル言説、それによって女性の儀礼の一部である FGC が焦点化されるとともに、ホール共同体は廃絶派と存続派に分かれて四分五裂の状態に陥る。女性たちは自分たちの専決事項であるエスニック・アイデンティティとジェンダー・アイデンティティの印となる重要な儀礼の廃止に抵抗し、男性たちは、一方で国家権力に屈して廃絶に

賛成した年長世代と、他方でそれに反発する次世代の若者たちや国家権力に距離をおく人々とは、女性の儀礼の支配権をめぐる対立した」という構図である。この FGC をめぐる立場の違いは納得できる。評者にとって納得できないのは、なぜ女性たちが一貫して FGC を手放そうとしないのかである。宮脇はその理由を、女性たちにとっての「エスニック・アイデンティティとジェンダー・アイデンティティの印となる重要な儀礼」(p. 133) というフレーズでまとめている。しかし、評者としては、儀礼が支えている両アイデンティティの源泉であるエスニシティとジェンダー秩序そのものを問題にしたい。つまり、ホールのエスニシティとジェンダー秩序を支えているのは何か、である。それこそが「家父長制」という妖怪なのではないか。評者のこの疑問は、本論文に先行して公表された宮脇論文「精霊憑依と新たな世界構築の技法——農牧民ホールにおけるアヤナ・カルトの意味世界」(宮脇 2014) で展開されている家父長制の議論によって解消した。そこには、ホールにおける家父長制イデオロギーの生成と仕組み、その中で女性たちの男性への徹底的な従属という「ローカルな想像の空間」が詳細に描かれている。ここから見えてくるのは、エスニシティが支える家父長制イデオロギーによって金縛り状態にされている女性たちの姿であり、その中で構築されているジェンダー秩序である。こう見えてくると、女性たちが「専決事項」として守ってきたふたつのアイデンティティの正体が見えてくる。それらは、家父長制イデオロギーを強化することはあっても、女性たちをそれから解放することはない。グローバル言説の介入がはからずも暴いた「専決事項」の危うさである。

家父長制は、日本でもそうであった／あるように、女性の心と身体を支配することによって維持され、その代償として女性には「保護」を提供している。家父長制から解放放たれるということは、女性がその「保護」を失うことを意味する。「保護」を失っても生きていける力を女性たちがどうやって手に入れることができるか、今、それが問われている。

3. 第3部「体制に挑む」

第5章 眞城百華「戦う女性たち——ティグライ人民解放戦線と女性」は、内戦という非日常が16年という短期間に推し進めたティグライ女性の社会的地位の変化を描いている。相続権も土地の所有権もないばかりか、農地を耕すことも村の外に出ることも禁じられ、教育を受けるチャンスもなく、幼いうちに結婚させられていた女性たちが、ティグライ人民解放戦線(TPLF)の兵士になることによって、変革の主体として表舞台に登場したのである。その数2~3万人。兵士総数の3分の1を占めたという。女性が男性と肩を並べて戦う兵士に志願するようになったプロセスは複雑だが、評者がその決め手となったひとつを挙げるとしたら、処女性が重んじられる社会で、性暴力を犯罪化したTPLFの政策を挙げておきたい。

注目すべきは、標的だった当時の政権を打倒し、政界の中心に躍り出たTPLFが、それまでの女性解放の流れを絶つことなく、女性に土地の保有権を与え、国会議員の30%を女性に割り当て、助産師育成などさまざまな教育プログラムを投入したりして女性の自立を

支援していることである。

アフリカに限らず、世界中で、戦争や内戦に巻き込まれ、兵士となったり、後方支援に駆り出されたり、ゲリラとして活躍した女性たちはいたが、戦争や内戦が終結すると、女性たちの貢献は評価されず、元の居場所に戻らざるを得ないという結末が繰り返されてきた。それに対し、ティグライの事例は、世界的にも類を見ない変革を女性にもたらした。読んでいて感動的ではある。しかし、眞城の語りから透けて見えてくるのは、変革の息吹がこれからも持続するに違いないという確信と、内戦後四半世紀を経て、かつてのジェンダー秩序が頭をもたげ徐々に女性兵士の経験が風化しつつあるのではないかという不安である。評者の目には、眞城のこの確信と不安は、そのままティグライの女性たちの揺れ動く心情と一本の線につながっているように思われる。

第6章 石原美奈子「キリスト教国家とムスリム聖女—スィティ・ムーミナの奇跡譚を通して」は、キリスト教からムスリムに改宗した聖女スィティ・ムーミナの奇跡譚『偉大なる所業』の検討を通して、彼女がどのようにして聖者としての崇敬を集めるようになったかを分析している。石原が導き出した結論はふたつ。ひとつは、「精霊との不和が病災の原因であると信ずる人々にとって、それを否定する教会やモスクは心荒む場所ではない。そうした人びとにとっては、類似の病災に悩む仲間と苦楽を共有できるファラカサ（記者注：ムーミナの墓廟のある聖地）は、「母」なるスィティ・ムーミナの懷に抱かれるがごとく、心のオアシスにもなっている」（p. 228）という宗教的側面の評価である。もうひとつは、ムーミナは「アムハラが政治的優位を占める体制に反対であったわけではなく」（p. 225）、彼女が立ち向かっていたのは「宗教や民族、貧富や階級、あるいは男女の別を重んじ、搾取や暴力によって民衆を苦しめる社会体制そのものであったのではないか」（p. 226）という政治学的・社会学的考察である。評者は石原の結論を是としつつ、もう少し異なるムーミナ像を提示してみることにする。まず、評者なりに、「史実」と思われる部分を拾いだし、ムーミナの生涯を再構成するところから、その糸口を探ってみよう。

ムーミナは1860年ころに生まれ、結婚したのは、おそらく10～20歳の間。一女を授かり、夫に従って、ラス・マコネン（皇帝ハイレセラシエ1世の父）のムスリム地域制圧の旅に同行する。その道中でムーミナは「光を授けられ」、病氣直しの力を神から与えられる。やがて、超人的な行動をとるようになったムーミナは、アッラーの名を唱え出したという。その後、一行はムスリムの町ハラルに到着。その町は1887年にアビシニア王国に征服されて間もないころで、治安は悪く、反キリスト教感情が蔓延していた。そこで、ムーミナはムスリムの祈祷集会「ハドラ」を開いて人びとを癒すようになる。おそらくムーミナ25歳くらいのころだったと石原は推測している。やがてムーミナの祈祷集会にキリスト教徒の軍人も集うようになる。この状況に危機感を抱いたラス・マコネンは、妻の介入もあって、ムーミナ追放に踏み切る。

ムーミナがイスラームに改宗したのは1893年ころとされているが諸説あり詳細は不明。追放後、ムーミナはキリスト教徒への敵意が強い地を点々と移動、その先々で迫害に遭いながらも、奇跡をおこしては自分を貶めようとする者を呪い殺す一方で、自らは禁欲を貫きつつ貧しい者への奉仕活動を続けたとされている。当局から不当な処分を受けることが多かったが、集会所のための土地を当局から譲渡されたこともある。1917年ころであった

と推測される彼女の死後、その墓廟には、年3回、今も、宗教を問わず、数千人にも上る憑霊者や霊媒師が参詣に訪れるという。

このムーミナのライフヒストリーから評者に見えてきたのは、ムーミナがはからずも演じさせられていたアビシニア王国によるムスリム地域制圧の先兵の役割である。制圧者にとって、制圧地域をうまく治めるためには、被制圧者との間を仲介する仕掛けが必要だ。ムーミナは、父方は皇帝の系譜に、母方はアムハラ帝国に戦いを挑んだムスリムの英雄アフマド・グランニの系譜につながっている。キリスト教徒とムスリムとの橋渡しを果たすに相応しい出自である。皇族ラス・マコネンの遠征に同行し、その妻の介入もあって追放されたとされている話も、彼女が一般の女性ではなく、特別な階層の女性であったことを示している。

ムスリムに改宗したムーミナは抑圧される側に身を置き、禁欲生活と貧者救済に身を捧げた。しかも本道の「モスク」ではなく、民間の精霊信仰の拠点である祈祷集会「ハドラ」を活動の拠点に据えた。ムーミナが軸足を置いた民間信仰は、ムスリムとクリスチャンの橋渡しをするのにつけてのポジションである。民間信仰——それは、制圧者と被制圧者とを結びつけ、アビシニア王国による制圧の先兵というムーミナの姿を民衆の目から覆い隠すワンダー・スペースだったとは言えないだろうか。ただし、ハドラの霊媒師が精霊に依拠するのと違い、ムーミナが依拠するのは一神教の神アッラーである。そのことの意味も、注意深く吟味される必要があるだろう。

なお、聖女ムーミナが、男性中心のキリスト教やイスラームに居場所を与えられなかった「女性」であったことは、まさにエチオピアの宗教領域のジェンダー構造を象徴している。アビシニア王国は、そうしたジェンダー構造を巧妙に利用したとも言えよう。

4. 第4部「聖性に集う」

第7章 松浪康男「ハドラに集う女性たち」の対象は、エチオピア中南部のオロモ社会で広く見られる祈祷集会「ハドラ」である。調査村の住民はキリスト教(正教)の信奉者であるが、改宗前のムスリム時代のハドラの慣習を堅持している。論文の目的は「目に見えない精霊を媒介にして行われる霊媒師と参加者たちとのやり取りがどのようにリアリティのあるものとして人々に受容されているのかを検討する」(p. 237) ことにある。

まず、男性主体のガダ体系が紹介され、次に女性主体のハドラ集会の詳細が叙述される。ハドラ集会での立役者は女性の霊媒師と精霊「アテテ」。人間に憑依しないアテテとは違い、霊媒師は精霊ウカピに憑依されており、このウカピの口を借りて女性たちの悩みに助言を与える。悩みの多くは病気や身体の不調が多い。その背景には遠方の病院に行けないという現実がある。霊媒師は相談者にアテテへの感謝や供犠や聖地への参詣を要求したり、オロモの慣習である首飾り(チャッレといい男系相続されるが所持者は妻)が正しく継承されているかどうかをチェックしたりしながら、悩みの原因を探り、助言を与える。ウカピは女性だけでなく男性にも憑いており、親子の間で引き継がれている。その引き継ぎが正

しく行われているかどうかも厄災の原因とされる。松浪によれば、この災因関係に一定のルールは見出せない。つまり、原因は特定されることはないのだという。試行錯誤の末、松浪は、相談者を癒すのは災因に関わる知的体系ではなく、集会の中で発散される感覚的・身体的な官能性であり、それによって女性たちは精霊ウカピの助言を腑に落ちるものとして受容する、という結論にたどりつく。論文の目的に沿った結論である。それはそれとして、評者としては、「ジェンダー」という本書の副題に沿った分析を提示してみたい。

まず見えてくるのは、厳格にジェンダー化された社会秩序の中で、男性は主としてコミュニティの問題に、女性は生活に密着した悩みに向き合うという性別役割分担である。次に、論文の中で7回も言及がある「不妊」の問題に注目したい。そもそもアテテは「女性が妊娠を望むときに喚起される精霊」(p. 239)なのだ。つまり、評者には、ハドラ集会が女性の集会であることと不妊の問題とは密接に関係しているように思われてならない。日本でもそうであるように、病院が手に届くような社会になっても、性別役割分担が解消されたとしても、不妊の問題は女性を悩ませ続けるに違いない。こう考えると、見えてくるのは、いずれ女性のハドラ集会は不妊問題に集約されていく、という未来像である。と同時に、不妊の悩みからの解放はフェミニズムにとって喫緊の課題であるという、グローバルな地平も見えてくる。

第8章 吉田早悠里「生活」の向上を目指す——ムスリム聖者村における女性組合の試み」は、エチオピア南西部の小さな集落が舞台である。ナイジェリア出身のムスリム聖者によって開かれた集落ということ以外、本論文で紹介されている女性たちの「生活の向上」を目指す取り組みとその挫折は、アフリカではおなじみのストーリーといってよい。つまり、女性たちは苦労して集めた貯蓄を元手に商店を開いたが、文字の読み書きができないばかりに書記を依頼した男性に売上と預金の全額を持ち逃げされ、組合が成長すると「生活の向上」という「上」からの指導のもとで登録を強いられ、製粉所の設置や食用油の販売などによる経済的利益を図るよう指導されるがうまくいかず、次にはマイクロファイナンスの開設を推奨されるもやはり上から要求された条件が整わずお流れになっている。もともと女性による祈祷集会から始まった組合活動だったが、規模が大きくなり、経済的収益を求めた結果、残ったのはメンバー間の軋轢や不信感だけだったという。吉田は、上からの介入によって、住民間の信頼関係を基盤とした土着の互惠的社会・経済ネットワークが失われることがあれば、公的な社会福祉制度の脆弱さを補う保険を失い、結局は女性のエンパワーメントによる国家の経済発展という政府の目的も挫折することになると結論付けている。ここでも、第2部と同じく、「上」からの官僚的かつ現場の状況を見ない理不尽な行政の介入が見て取れる。女性たちが結束して体制の横暴に対抗できる知恵やノウハウを身につけるには何が必要なのか。その際「聖性」がいかなる役割を果たすのか。今後の展開を見守りたい。

5. まとめに代えて

まとめに代えて、本書全体への講評を試みる。ひとことで言えば、いくつかの論文を除き、副題の「社会変化とジェンダー」に即した考察や分析の甘さが気になった。その主たる理由は、人類学のアプローチと関連しているように思われる。論文に加えた評者のコメントは「家父長制」や「女性の自立」、あるいは「フェミニズム」といった視点から、ミクロ世界とマクロ世界との関連を論点としている。ミクロの意味世界の分析を志向する人類学からすると構造・機能主義的なアプローチだと、逆に批判を受けるかもしれない。しかし、歴史学徒である評者からすると、ミクロの「行為主体」に寄り添うあまりに、その行為の構造や秩序への位置づけを疎かにすると、「行為」のはらむ客観的な意味を見落とすことになるのではないかという危惧を抱いてしまう。これは、あくまでも「人間」という存在やその営み自体の意味の解明を目的とする人類学と、社会の変化の中に人間を位置づけようとする歴史学とが「相性が悪い」とされる原点なのかもしれない。しかし「社会変化」と「意味世界」の両輪がうまくかみ合えば、人類学の成果は十分に歴史学の資料となる。評者は、人類学にそれを期待している。

最後に、エチオピア一国で、これだけ厚みのある女性の民族誌を編まれた編者と執筆分担者に敬意を表し筆を置く。

参考文献

石原 美奈子編

2014 『せめぎあう宗教と国家——エチオピア神々の相克と共生』、風響社。

宮脇 幸生

2014 「精霊憑依と新たな世界構築の技法——農牧民ホールにおけるアヤナ・カルトの意味世界」、石原美奈子編、『せめぎあう宗教と国家エチオピア——神々の相克と共生』、風響社、pp.239-289。